

あしひきの

山桜花

日並べて

かく咲きたらば いと恋ひめやも

山部赤人 卷八・一四二五

私が生まれ育った南九州では、桜は卒業式の頃に咲く花でした。テレビやマンガで入学式の背景にあるのを見て、違和感を覚えていたものです。

ところが、『万葉集』では秋を詠む歌がもっとも多く、次いで梅が詠まれています。ただ、歌の数だけで計れない面もあります。この歌は満開の桜の花を見て、もしも何日も咲き続けるのならこんな恋い焦がれることなどないのに、と時期の短さを嘆きつつ、数日であってしまつからこそ

やまと 万葉がたり

の美しさをたたえています。数は少なくても、はかない美を愛する思いは今も昔も変わらないうようです。

一方、桜は繁栄の象徴でもありました。一説に『古事記』や『日本書紀』に登場するコノハナサクヤヒメという女神も桜にゆかりが深く、繁栄を象徴するといわれます。平城京を

たたえた「咲く花の薫るがごとく今盛りなり」(巻三・三三八)という表現も、そうした発想を下敷きにしていたとみられます。

古代に「桜」と呼ばれた植物は、現代に一般的なものイロシシではなく、ヤマザクラと

丘の緑の木々の間に、「桜の霞」がぼつと浮かびあがります。それを見る度、あそこに桜の木があったんだと思ひ出します。通勤途中のささやかな花見は毎年の楽しみのひとつです。

◇ 古代人の心を現代に伝える万葉集の魅力を伝える万葉文化館の研究者に紹介してもらおう。

【訳】あしひきの山の桜が何日も、このように咲くのなら、どうしてひどく待ち焦がれよう。

うららうらに 照れる春日に 雲雀あがり

情悲しも 独りしおもへば

大伴家持 卷十九・四二九二

ヒバリは春を告げる鳥ともいわれます。おだやかな春の日差しの中、ひらけた野原でヒバリがさえずりながら空高く舞い上がる様子は、私も通勤途中でよく目にします。のどかな風景とほかほかと過ぎやすい陽気に、思わず笑顔になります。ところがこの歌では、そんなほっとするような情景に対して、「情悲しも」と詠まれています。何か特別な事件が起こって悲しい、というのではないうです。「独りしおもへば」と続き、独り居て、物思いをすることによってもたらされる悲しさが表現されています。

うららかな春日、陽光もまぶしい明るい屋外と、対照的に薄暗い屋内に独り居る自分

やまと 万葉がたり

—そんな状況を想像してみます。屋外が暖かくおだやかであればあるほど、対する屋内の暗さや静けさ、肌寒さが意識されるかもしれません。

この歌の左注には、憂愁の心は歌以外では除き難いので、この歌を作ることによって鬱情を晴らす、とも書かれています。孤独を表現したこの歌を詠むところだが、その愁いを晴らす唯一の方法だといふのです。

うだともいわれます。いつも人に囲まれているような明るくにぎやかな生き方も羨敵ですが、独り黙ってじっくり物を考える時間が多い生き方にも、別の豊かさがあるように思えます。奈良時代に生きた家持も、優しい家族や愛する人と同じ時間を過ごしながら、独りもしれません。

(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか)

—隔週掲載

【訳】うららかに照っている春日の日に、ヒバリが飛びかけり、心は悲しいことよ。ひとり物を思うと。